

## ビルマ（ミャンマー）の山村経済と資源利用

東京大学東洋文化研究所教授

高橋 昭雄\*

まず最初に必ず質問が出るミャンマーかビルマかについてですが、あらかじめ答えますと、どちらでもいいんですね。1948年にビルマが独立した時、英語名ビルマをミャンマーに変えたのであり、ミャンマー語では一貫してミャンマーのままです。アウン・サン・スーチーもミャンマー語で演説する限り、ミャンマーという言葉を使っていました。問題があるのは、ミャンマーもバーマも国民の70%強を占めるビルマ族の名前で、少数民族のことが考慮されていない。ただし、これはバーマであれ、ミャンマーであれ、同じことでもあります。私はビルマという時代に行きましたからビルマという言葉を使いますが、ミャンマーと呼べと言われればそう呼びますし、どちらでもいいです。

### 1. ミャンマーに棚田！

参考文献を読んでいただくとわかると思うのですが、1986年から私はビルマの主に平地部の農村に住み込んで、農村調査を続けてきました。ところが平地の農村をやっていると、最近水の問題がよく起こっていることがわかる。例えば雨が降らなかったのに突然水かさが増したりといったような。いろいろ聞

---

\* 1981年、京都大学経済学部卒業。1993年、京都大学より博士（経済学）号。アジア経済研究所勤務（1981～96年）後、現職。主な研究分野は、ミャンマー（ビルマ）の農業・農村経済で、近年は同国辺境地帯の社会経済的研究に関心を広げる。主な出版物には、『ビルマ・デルタの米作村：「社会主義」体制下の農村経済』（アジア経済研究所、1992年）、『現代ミャンマーの農村経済 移行経済下の農民と非農民』（東京大学出版会、2000年）などがある。

いてみると、木材の伐採が非常に多いということがある。ダムの問題もある。ものすごい勢いでダムをつくっている。この5年間、世界一ダムを造ったということで、FAO（世界農業機関）から表彰されたんじゃないかな。山の問題も資源・水の問題と関連して非常に深刻になってきているというイメージがある。さきほど話題にのぼったパルーチャウン、これは「鬼の川」という意味の名前ですが、その上流にインレー湖という大きな湖があります。その周辺はもうほとんど木がなくなってしまっています。ダムの問題は、上のほうで木がなくなって、土砂が川に流れ込んで、ふさいでしまうということにある。だからダムの効率が非常に悪くなる。そういうこともありまして、今日は山村経済の事例をお話したい。

それで、先ほど政府の話も出ましたが、ビルマでは政府とは環境と言えます。日本では「地震・雷・火事・親父」と言いますが、ビルマでは地震がないので、「雷・火事・政府」と言っていじり、政府は環境であります。「政府とは自分たちでは変えられないもの」というのが、ビルマ人の基本認識であります。そういうような環境で生きている。先ほど秋元さんはすぐ捕まえられてしまうから怖いよとおっしゃっていましたが、なにしろ軍政ですから非常に治安はいいです。悪いことするとすぐつかまりますから。言いかえれば、非常に平和な国のようです。そのような政府も含めた環境に対して、村の人がどのように生きているかを今日はお話します。シンポジウムのテーマである開発援助については、質疑のほうでできればお答えしたい。

棚田ブームというのがある。ミャンマー政府は1993～98年の5年間で棚田の面積を3倍にしようとしています。日本では棚田はどんどん放棄されているのに、ビルマは棚田をどんどん作ろうという非常に珍しい国です。なぜかという焼畑が非常に多い。特に丘陵地に多い。焼畑をなんとかしようというのが政府の意図です。これについてはいろいろ問題があるんですけど。

調査したのは、中国と国境を接するナムカン郡の中にあるパラウン人の村です。標高が1500mくらいあります(写真1)。ナムカン郡はコーロンリーショー

(写真1)ナムカンの村から中国を望む



人という、中国人のアイデンティティを持つ人も標高 2000 m のところに居住しています。この中国国境の棚田地帯というのは、少なくとも 250 年前からあったとの口承伝説があります。他地域との違いをいいますと、たとえば日本は共同体ベースで棚田を作ってきていますが、ミャンマーの場合、全部、家族・個人ベースで作る。これは少数民族を含めたビルマ全体に言えることですが、共同体的な所有というのは、森林を含めてほとんどないです。少なくとも共同管理はない。今、NGO や国際機関が共有林を作ろうとしています、そういう伝統がないところに作ろうというのは大変かな、と。

一方、インド国境に近いチン州のハカでは棚田が 1960 年代から作られています。ここは米が不足している。主食はとうもろこしで、これを焼畑で作っています。しかし、政府の米自給策や米への選好のために棚田を作りはじめる。

## 2. 棚田だけでは生活できない

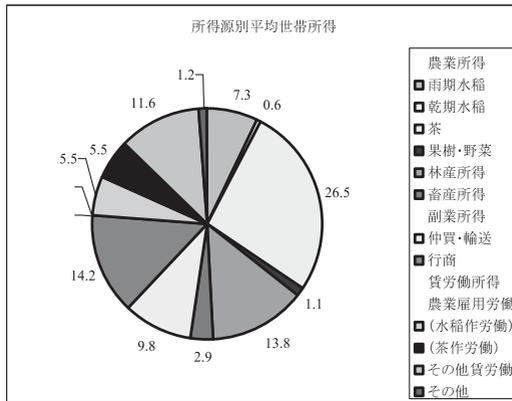
私は政府が棚田を作ろうとしているところで、いったいどういう問題が起こりうるのかを調査してきました。ナムカン郡の場合は、パラウン人はもともとは山の民族ですから、焼き畑耕作をしていた。これをタウンヤーと言います。タウンは山、ヤーは畑。これをアグロフォレストリーとしたのはイギリスの政

策でありまして、もともとは焼き畑、移動耕作を指す語です。従来パラウン人はオカボ（陸稲）を作っていた。しかし、一部の富裕層、あるいは村の草分けの人たちは、棚田を作っていたと思われます。個人ベースで棚田を作っていますから、多くの労働力を支配できる人が棚田を作りました。したがって、棚田を作った人たちは、村のごく一部にすぎません。私の推計では村の全世帯数の5分の1ぐらいしか棚田を所有していない。つまり、棚田と焼き畑移動耕作は、併存していた。焼畑に伝統種を播種する場合、1年目は焼畑でも棚田と同じくらいの収量をあげられるけれども、2年目から焼畑では陸稲を作れなくなってしまう。

さきほど労働力を支配できると言いましたが、元来、東南アジアは人口希薄な地域でありまして、土地はもともとそれほどの意味を持っていない。どれだけ人を逃げないように支配できるかが重要な世界であります。したがって、共同体ができればいい。私は千葉の村の出身ですが、共同体があればあったでそれはそれは面倒くさい。そういうことを避けて、やったほうがいい。ミャンマーはそうやってきたところ。ところが、1960年代、世界的な現象と言えるかもしれませんが、非常に人口が増えてきます。人口圧により、焼き畑の移動耕作ができなくなり、米が不足してくる。そうすると、彼らは非常におもしろいことですが、一斉に商品生産を選択しました。よく商品経済が村に浸透するという言い方がありますが、この場合は彼らが自ら商品経済を選び取ったと言えるでしょう。彼らは移動耕作をやめて、定着してお茶の生産を始めます。これは政府の指導でもなんでもなし。お茶を植えて、売って、そして米を買う。そのような選択を集団で行うことによって、人口圧という環境の変化に対応したと考えられます。

1960年代以降、棚田と、焼き畑が変化したお茶畑が両立します。ところがお茶は蒸さないといけない。そうすると、薪が必要になってくる。ここから森林の問題になってきますが、木を伐採して薪をつくらないとお茶を蒸すことができない。つまり、村および個人の世帯の再生産をすることができない。それ

(図1) 所得源別平均世帯所得



から、焼き畑をやめた人は、一部は棚田を作ったのですが、日本では棚田という無農薬米や無肥料米を想像するかもしれませんが、ここの棚田はものすごく発展していき、まだ日本にも入っていないF1、ハイブリッドライスを導入している。肥料の量も平野部よりずっと多い。お茶を売った収入で買ってくるわけです。つまり、山の中で商品経済から離れた牧歌的な暮らしというイメージがあるかもしれませんが、実はそんなことはない。これがビルマの現状です。棚田とお茶畑と薪炭林、これが世帯の主要所得を構成するわけです。

図1は調査したこの村の58世帯の平均所得の構造です。水稲が7.9%と非常に少ないですね。ミャンマーのような途上国の経済は非常に統計がとりにくい。ミャンマーは非常に貧乏な国で、1990年代にはラオス、さらにカンボジアにまで抜かれて、ドルベースで言うとASEAN10か国では最貧国です。ラオスやカンボジアも一緒かもしれませんが、この図の中でGDPに入るのは水稲・茶ぐらいで畜産、仲買・行商、あるいは農業労働は統計に入っていない。

これは平地でも山地でも同じですが、農村はイメージに反して農業だけで食っているわけではなく、非常に様々な収入がある。それはどこでも一緒です。なぜかという、まず土地の分配が非常に不平等だから、いろんな方法で生計

を立てなければならない。それからビルマは農業国ですけど、農業に対する締め付けが非常に厳しいので、土地を持っている人でも農業で稼いだお金を農業に再投資しない。だから、農業は発展しません。地べたをはいずりまわって調査しないと、ビルマの本当の経済というのは、なかなかわからない。

棚田を作っているところから、もう少し上の方に行くと、麻葉をやっていました。芥子ですね。これを作っているコーロンリーショー人はかなり上のほうに住んでいますから、米を買うことがかなり難しい。そこで棚田で米を作りながら、現金収入を得るために、お茶は失敗してしまったので、芥子を作って売っているわけです。それが経済的に最適だったわけです。しかし、これは道徳的にまずいわけですね。しかしやめてしまうと食べていけない。そこで先ほどお見せしたように、大変きれいな棚田があるわけですけど、耕作放棄が進むわけです。つまり、棚田があるだけでは生活できない。政府は今一生懸命棚田を作っていますが、そこに人を呼んで生活させるのはなかなか難しいかもしれません。そういうレポートをビルマ語で書いて渡してきました。

次に、今度調査しようと思っているチン州です。この辺は昔は豊かな森林があったのですが、今はかなりなくなっています。先ほど、秋元さんは軍がどんどん森林を伐採していると言いましたが、軍は薪ではなくて、チークなど価値のあるものを伐採しています。ここは軍というよりも周囲の人々によって伐採された場所です。ところが、人口が少ないうちはいいのですが、多くなると移動耕作ができなくなる。すると、棚田が作れる人たちは棚田を作り出すというような現象が1960年代ぐらいから起こった。ところで、タウンヤーでも商品生産は行いますが、商品生産を行うことは自分の食う分以上に焼くということですから、やはり環境にとって負担となるわけです。それでも今の商品経済のレベルには追いつかず、結局焼き畑と棚田に加えて、インドへの出稼ぎをしています。インドのミゾ州はマニプールの南にあるんですが、チンの人たちと言葉が通じるんですね。そこまで車代500円ぐらいで行けるんですが、それももったいなくて、一週間山の中を歩いて出稼ぎに行く。そういうことで、現金収入



を得ているのが現状です。農業国と言っても、農業だけでは食っていけないのが現状のようです。

写真2は現在進行中の焼畑作りのための伐採の現場ですが、共同作業と言うよりも世帯がある面積をおさえて、伐採をしている。一人か二人ぐらいしか伐採していない。それから多くのチン人は、ビルマの平野部の、中心部の家よりもいい家に住んでいる。出稼ぎで稼いだお金で建てたものではないでしょうか。

### 3. 森林資源はどのように管理するのか

棚田だけでは生活できず、棚田をいくらつくっても森林資源の保護には結びつかないかもしれない。それでは、村の人たちはどのようにして森林資源をサステイナブルな状態にしてきたか、あるいはそのように努力してきたか、を検証しなければいけません。棚田の開発も焼き畑も個人ベースで、早いもの順です。コモنزの危機が起こりやすい状態です。しかし共同で管理はしない。そこまでコストはかけない。そこで、個人で管理するというシステムを作り上げた。どういうふうに管理するかというと、注目は水田と茶畑と薪炭林ですね。この3種類の土地の保有面積を見ると、茶畑と薪山を一緒に持っているところがかかなり多い(図2)。相関係数は、0.606。非常に高い。茶畑は薪

(図2)地目別保有面積間の相関

地目別保有面積間の相関行列			
	水田	茶畑	薪山
水田	1		
茶畑	0.291	1	
薪山	0.196	<b>0.606</b>	1

地目別経営面積間の相関行列			
	水田	茶畑	薪山
水田	1		
茶畑	0.273	1	
薪山	0.111	<b>0.614</b>	1

太字は無相関の検定で1パーセント有意、イタリック体は5パーセント有意をそれぞれ示す。

山がないと再生産できませんから、これを個人が組み合わせて持つ。このペアを相続していくというシステムによって、森林資源を確保する。共同体管理よりも、きわめてコストパフォーマンスが高い制度を作り上げています。ところが、最近、これがますます薪炭林の規模が減少して、うまくいかなくなっている。これをどうするかということは、最後に言います。

それから、八カの場合、ダムウジャというシステムがありました。ダムは山刀、それを一番先におろすという意味ですが、これがうまくいかなくなりまして、長子相続にして、他のものは別の場所を耕すようになるんですが、やはりうまくいかない。そうすると、村が介入してくるんですが、先祖代々の相続を優先させた上で、僻地を村が分配する。そういうシステムに変わっていく。くじびきもします。ここで共同的な管理が少し入る。面白いのは、日本では長子相続と決まっていたのですが、ここでは分割相続から長子相続、それでもうまくいかないと、土地以外の財、宝石・お金・耐久消費財などをバスケットとして分割するようなシステムに変わり、土地は分割しないけど、うまく分けていく。相続制度というのが変わりやすい。

棚田という非常に環境にやさしそうなものがあるんですが、経済的にはそれだけで再生産は不可能です。森林、多就業という形で対応して、常に変化に対応していくのだらうと思います。どう変化するかは、社会経済的な調査が必要となるでしょう。ミャンマーは社会主義を経たのですが、所得格差が非常に大きい。ジニ係数で0.4～0.5です。共同管理への移行についてももう少し付け足すと、ある村では、オーストラリアのNGO（非政府組織）が井戸を掘ったのですが、共同的な管理ではなく村の所得格差を反映したような管理システムができてくる。小さな構造物をつくるにしても、利用形態が村社会の形態によって決まってくるわけです。

最後に、いろんな強制手段、人口圧・商品経済が村に影響していきますが、彼らはそれなりに対応していかないといけないし、良い悪いを別にして、歴史的に見ても対応していくのではないかと考えています。

### 【質疑応答】

**フロア** 2点質問します。第一に、商品経済が1960年代に浸透したのはずいぶん早いように思われます。中国、インドの影響もあるのかと思いますが、少しご説明いただきたい。第二に、薪と茶畑の相関係数が0.606と非常に高いとのことでしたが、薪を伐採した後に再植林は、全く行われていないのでしょうか。

**高橋** 第一番目の問題ですが、1960年代は商品経済が入ったというわけではなく、お茶を売って米を買うという生活を自分で選択した。市場は彼らが開発していった、ということです。もともとお茶をビルマの人はたくさん飲んでいるですが、必ずしも自給していたわけではなかった。また、ナムカンの村には1925年ぐらいから中国からお茶を買う商人が来ていた。つまり、かなり早くからお茶の商品化は進んでいたと言えるかもしれない。

第二の問題ですが、再植林はしません。1エーカーの茶畑に対して、0.2エーカーの薪炭林があれば、それでサステイナブル。放っておけば、木は出てきます。ただし、炭を焼くとすると、また別の問題になります。

**フロア** 3点質問があります。麻薬の問題ですが、麻薬はどれぐらいビルマの経済に占めているのか。治安がいいといっても、外国人にとってはそうかもしれないが、現地人にとってはそうではないのではないのか。犯罪統計がわかれば教えていただきたい。また、地方の水争いの実態についても教えてほしい。

ビルマかミャンマーかという名称の問題。朝鮮をコリアと日本語で呼ばないが、なぜビルマの場合だけ英語で呼ぶのか。

**高橋** 麻薬の統計は、国連薬物犯罪オフィス（UNODC）のものがあります。ビルマの経済への影響は報告でも述べたように、麻薬以外の経済全体の統計もなかなかつかめないのが、正確にはわからないとしか申し上げられませんが、かなり影響があるとだけ、言っておきます。

ワとコーカンが麻薬でかなり発展していますが、停戦協定を結んだところは芥子栽培を撲滅しています。特にワは一生涯懸命やっています。ただし、これはマインラーという停戦協定地区内の話ですが、オピウムフリーだがドラッグフリーではない。芥子が生態系に合っているということはないが、支配が及ばないところではつくられています。メタアンフェタミン系の麻薬をタイではヤーバーと呼んでいますが、最近、ヘロインからヤーバーに移ってきています。そういう意味で麻薬はビルマではまだ撲滅にはいたっていません。

治安は比較的安定していると思われれます。たとえばタクシーに乗る時は後部席ではなく隣に乗るといった話は以前からありまして、いまになって増えたわけではありません。Statistical year book で見ると、軍政下で犯罪は明らかに減少しています。水争いについてもほとんどありません。末端まで政府が管理しているからです。

地方の水の争いは、日本の江戸時代のほうがよほど悲惨です。治安にとって最も大きな問題は、泥棒です。牛泥棒もいます。銀行を信用していないので、財産を基本的に家においてあるため、泥棒・強盗が多い。そこで村に門をつけたりもします。報告ではビルマには共同体がほとんどないと言いましたが、それはあくまで生産共同体の話で、消費に関する共同性、すなわち村の寺院を守る、共同の祭祀、火災の対策など消費経済の共同性は存在している。

軍政が英語の呼称を 1998 年にビルマ連邦からミャンマー連邦に変えたことによって、マスコミ・大使館が対応しただけと言えます。それが各国により違うだけです。タイではビルマのままですし、インドネシアではオランダ語源のものを使っています。向こうの政府の発表に従うか従わないかの問題です。